ラーニングサポーター

１．はじめに

大学における学びが多様化している現在、学生の主体性を活かした学びの創出が期待されている。日々の授業においても、リアクションペーパーのコメントを次時の学びの手がかりにしたり、クリッカーで学生の理解度や意見をその場で確認したりと、双方向型の学びが意識されている。また、知識を教授することが中心となる講義科目においても、ペアワークやグループワークが積極的に取り入れられ、受講者相互に学びあう時間が確保されている。

では、こうした学習スタイルに、教育の当事者である学生たちは十分適応しているのだろうか。現在、多くの大学でアカデミック・スキルを育成する授業が設けられている。本学においても「入門ゼミナール」が共通科目に置かれ、各学科でアカデミック・スキルの育成が図られている。しかし、修得が望まれるスキルは多岐にわたり、さらに、アカデミック・スキルは実際に活用してこそ磨かれるため、初年次のみの指導では十分とは言い難い。例えば、「入門ゼミナール」で学ぶことの多い「レポートの書き方」などは、実際にレポートを書く経験をしてから学んだ方が、スキルの定着度は高いと思われる。そうはいっても、各授業のなかで、教員がアカデミック・スキルについて丁寧に取り上げる時間はない。

そこで、学生自身が相互に学びあい、アカデミック・スキルを修得する機会を創出したいと考えた。そうした学びあいの機会を生み出す組織が、ラーニングサポーターである。

２．ラーニングサポーターの組織

ラーニングサポーターに類する組織は「学生ＦＤ」とも称される。その目的は、学生と教職員が協働しながら、教育環境ならびに授業内容を改善・向上させていくことにある。具体的には、学生が授業や学習環境について自由に語り合う場を主催したり、学生目線でおすすめの授業を紹介したりするような取り組みがある。また、学生によるシラバスの読み説き方、上級生による「学び方講座」の実施（ポートフォリオの活用、学びのロールモデルの紹介、学内施設の活用方法）、学生発案の授業の実施、などもなされているようである。

本学においても、2021 年 4 月、2022 年 4 月に新入生向けの学び方講座を、Zoom を用いて実施した。ただし、その後、ラーニングサポーターしての実質的な活動に、組織を発展させることができなかったため、2023 年度は継続的に活動を行うことを目指し、組織作りを再度行うことにした。

３．ラーニングサポーターの募集

2023 年 1 月 19 日、29 日の昼食時間に説明会を実施した。学生たちに事前告知した内容を以下に略記する。

19 日、29 日合わせて 7 名の学生が参加した。年度末で期末試験期間中ということもあり、多くの学生の関心を集めることは難しかったが、集まった学生は意欲的で、次年度の活動が期待できるものであった。説明会には、ラーニングサポーター担当教員の他、全学 FD 委員長、教務部長、教務課長、課員の担当者が集い、学生・教員・職員の三者で学びを創っていくことを、参加者の共通理解とすることができた。

【事前に告知した内容】

■活動頻度

・月１回、昼食時に全体ミーティング

・プロジェクト毎に随時活動

■活動例

・学科・学年混合で授業に関して意見を交わす会の企画・開催

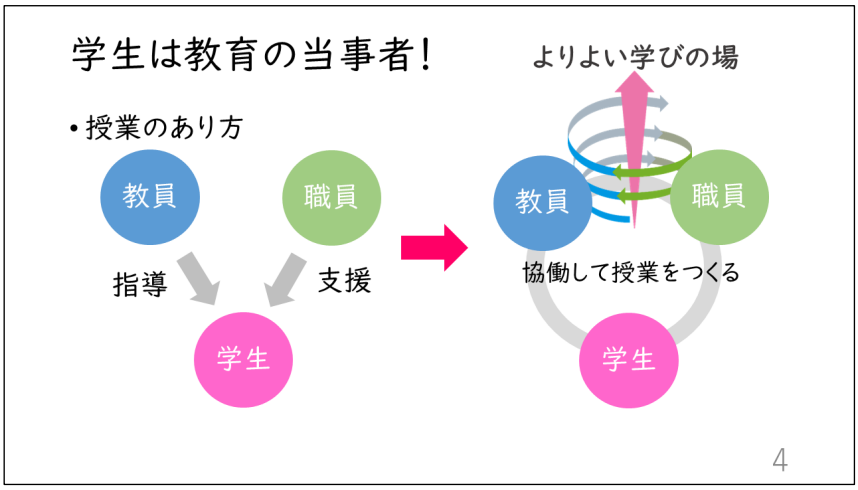
・学生が案内する大学施設巡り

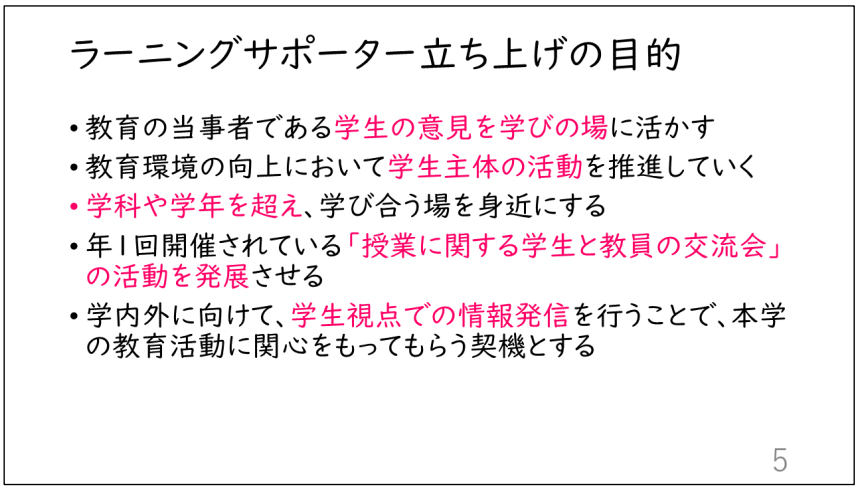
・学生が開催する「学び方講座」　※レポート・リアクションペーパー・ノートの取り方など

・大学生なら知っておきたい便利ツール講座　※ICT の活用、生成系 AI の利用など

・教員と授業改善に向けての議論・検討

【当日示したスライドの一部】





４．学生たちの声から

集まった人数がそれほど多くなかったこともあり、両日ともにフリートークの時間を設けた。

主な話題は、学習環境について改善を要すると思うこと、ラーニングサポーターとして取り組んでみたいことなどであった。

ここでは、当日話題として挙がったシラバスと授業評価アンケートに関して、学生の意見を記述する。

（1）シラバスについて

後期終了時に説明会を実施したこともあり、シラバスの記述と実際の授業との相違に関して意見が挙がった。

学生たちは、必修科目以外はシラバスの情報をもとに履修科目を選択する。ただし、学生の理解度に応じて授業を進めると、場合によってはシラバス通りにいかないケースもある。取り扱う内容を調整したり、割愛したりすることも考えられる。しかし、シラバスは学生との契約書であるため、授業内容に変更が生じた際は、学生が納得できる理由を説明することが教員には求められる。

また、一部の授業において、成績評価となる指標がシラバスで示されているものと異なっている、といった指摘があった。2024 年度より各授業でルーブリックの活用が推進される。授業時にルーブリックを適宜参照しながら、成績評価について教員と学生とで共通の見解が持てるようにしたい。特に、学科必修科目で、クラス別に実施されている授業においては、成績評価にばらつきがないようルーブリックの活用を推奨したい。

（2）授業評価アンケートについて

説明会実施時は、授業評価アンケートを実施している時期だったため、授業評価アンケートに関する話題が挙がった。

まず、授業評価アンケートの自由記述欄に関する意見として、150 文字ではなかなか意見がまとめられない、という意見があった。確かに、良い評価であっても改善してほしいという要求であっても、150 文字で説明するのは難しい。150 文字を超えてしまうと登録そのものができないため、結局ありきたりな言葉でコメントを提出した、という声が聞かれた。

また、授業評価アンケートに回答しても、教員からフィードバックがないと回答する意欲が減退する、という意見があった。

以上のような意見を参考に、今後、授業評価アンケートに関しては、以下の取り組みを検討していきたい。

① 自由記述欄の文字数制限を見直す
② 授業評価アンケートの書き方講座をラーニングサポーターで実施する
③ フィードバックの書き方について教員間でそのノウハウを共有する

①については、ポータルサイトの設定で即対応ができるだろう。

②については、今後、学生と協働しながら、実施に向けて動いていきたい。考えてみれば、授業評価アンケートは無記名のため、学生自身が「伝わる書き方」を意識していなければ、教員側

は、授業改善に向けて意見を取り入れることができない。ましてや、当該学生に具体的な提案や意見の真意を、問い返すこともできない。授業内容が「わかりにくかった」のなら、何がどのようにわかりにくかったのか、どのような指示やサポートがあればわかりやすかったか、などを学生自身が思考し、それをわかりやすい言葉で伝えてほしいと願う。

③については、例えば、学生が納得したり、学びになったと思ったりする教員のコメントを、ラーニングサポーターがピックアップし、その書きぶりを教員間で共有することで、次回のフィードバック作成に活かす、などの取り組みが考えられる。

以上が、説明会時におけるフリートークの場で得られた意見であった。授業評価アンケートに関しては、実施するだけでは意味がなく、得られた結果を授業改善に活かすことに意味があることを、学生・教員ともに再確認する必要性を実感した。

５．次年度に向けて

春季休業中に、ラーニングサポーターの説明会に参加した 3 名の学生と、次年度について打ち合わせをする機会を得た。

コロナ禍を経て、イベントがしやすくなったこともあり、次年度は「ランチイベント」として、学びについての学習会を複数実施できたらよいのでは、という意見が挙がった。「ランチイベント」であれば、関心のある学生は昼食をとりながら気楽に参加できる。また、企画に携わるメンバーの負担も大きくない。講座そのものは、30 分程度のミニ講座だからである。

前期は、履修登録を終えた 5 月に 1 回、比較的落ち着いた時期となる 6 月に 1 回、開催を予定している。

現在、学生たちが立案した学習会の概要は以下である。

①　メールの書き方（5 月）

主に新入生向け。教員と連絡をとる方法としてはメールが多いが、その書き方はあまり指導されない。様々なシチュエーションを例に取り上げ、伝わるメールの書き方を学ぶ。

②　リアクションペーパーの書き方（6 月）

授業時に書くことが多いリアクションペーパー。何を書いたらよいかわからない、という声をよく聞く。講義を聴きながら考えたことを、リアクションペーパーにつなげるコツを学ぶ。

後期には「レポートの書き方」や「情報検索の方法」などを皆で学んでもよいのではないか、という意見が聞かれた。ただ、一口に「レポートの書き方」といっても、それぞれの学問領域によって、その構成や文体には異なりがある。そこで、ラーニングサポーターが主催する学習会では、あくまでも基本となることのみを取り上げ、各教員が行う専門的な指導と齟齬が生じないよう注意したい。

また、もう少しカジュアルな活動内容としては、おすすめ文具やおすすめアプリの紹介、生成ＡＩの勉強会、などの案が挙がった。学生たちを取り巻く学習環境は日々変化している。便利な

ツールを使いこなすことによって、学びがさらに深まることを期待したい。

６．今後の展開について

ラーニングサポーターに類する組織を創りたい、という計画は、実は新型コロナウイルス感染症が流行する前からあった。なかなか組織化ができず現在に至るが、まずは、学生自身が学びを創る当事者であるという意識を学内に醸成し、学生のペースで無理なく学びを創っていくことを大切にしたい。

そのためには、学生たちの「やってみたい」と思う意欲をくみながら、取り組みやすい内容から活動していくことが肝要となるだろう。さらに、学びの情報発信という点でも、ラーニングサポーターに対する期待は大きい。そして、数年後、ラーニングサポーターの活動から、ロールモデルとなる学生が現れ、活動が自走していくことを願う。

また、教職員の FD に資する取り組みとして、いずれは、授業アンケートの分析にも関わることができたらよいと考える。学生ならではの観点で、授業改善につながる意見を提案してくれることを期待する。

以上